Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., **58**, 123－130（2010）
武庫川女子大紀要（人文・社会科学）

石津亮澄について

管　宗次
（武庫川女子大学文学部日本語日本文学科）

一、はじめに

『百人一首一夕話』の著者である尾崎雅嘉の門人として、もっとも著名な人物は石津亮澄をあげることができよう。尾崎雅嘉の晩年は不幸で、老いに病を得て、妻（名を卯野）も同病であったというし、門人によって密かに著書が盗み取られるという、学者としてもまことに残念なことであった。

著者不明の「人物小伝」（所在不明、幸田重友「尾崎雅嘉」(1)に引用されている）では、次のようなことが書かれている、尾崎雅嘉の実弟である谷川于喬（医者で、谷川家に養子となって谷川氏を称した）は、自分の子に尾崎家を継がせたという。果たして、いかなる経緯と相成ったのか、尾崎の家と学統は途絶えてしまったようである。

石津亮澄が尾崎雅嘉の門人であることは、大阪市天王寺区空清町四―二の円珠庵にある石津亮澄墓石銘によって明らかである。次にあげる。

富草屋石津亮澄之墓（正面）
天保十一年二月九日没（右側面）
富草屋石津君墓君姓石津名亮澄並輔富草屋其號又號米居君性嗜和歌初従蘿月尾崎氏游焉後事藤垣本居翁学既成イ就之者多云安永八年己亥十月十三日癸亥生於攝曽根崎天保十一年庚子二月九日歿於浪華六十二

これによると、尾崎雅嘉の没するに及んで、本居藤垣翁に学んだというので、本居大平に就いたことがわかる。石津亮澄、安永八年十月十三日、大坂曾根崎村に生まれた。通称を並輔（平助）、号を富草屋、米居、読本には聴雨軒と号し、狂歌号を無心亭有耳という(2)，(3)。

『大坂本屋仲間記録』(4)『享保以後大阪出版書籍目録』(5)などをみると、はじめ曽根崎村に住み、のちに南本町二丁目や南本町三丁目、次に唐物町中橋、唐物町三丁目に住居を移している。先考論文(6)，(7)も参照にしつつ進めていくことにしたい。

大坂においても、本居宣長の門人である村田春門が門戸を張って以来、鈴屋の学問が大きな勢力をもち、ちょうど本居宣長没後の時期が上方での文化が様変りしようとするころであった。文化・文政という長く続いた比較的安定の時期から天保という年号で、人々の風俗もすっかり変わるなか、石津亮澄は著述も多く様々な仕事を残している。

二、石津亮澄の学風

石津亮澄は著述の多い人で、読本から名所図会、といった創作から『萬葉二聖集』、『屏風絵題和歌集』、『新撰はし書ふり』、『和歌拾遺六帖』など和歌に関わる著書もあり、また無心亭有耳を称して狂歌の著述もあるなど、尾崎雅嘉もそうであるが、今日のジャンル分けで国学者という枠だけでは収まらぬものがある。

また、当時の上方の歌人国学者の動向を知るのに有難い資料である『村田春門日記抄』(6)（『渡辺刀水集　三』青裳堂）に、見える石津亮澄の記事を拾うとなかなかに興味深い。

文政七年九月
二十二日
快晴、午前北野天満宮参詣、午後早々鐸舎出席、故大人（本居宣長）像をかけたり、兼題名所紅葉也、席上高尚（藤井）大館高門（尾張・宣長門）石津亮澄（大阪人、大平門）安田長穂（若山人、大平門）植松茂岳（名古屋人、宣長）其外、京地人々あまたなり、高門は凡三十四五年振にて逢たり、

天保五年四月
六日
一、大坂三月二十五日出書状　嘉言　参着。過日神戸村富家木屋東左衛門と申者、高尚（藤井）亮澄（石津）広海（大江）雪臣（垣本）私（嘉

言）など招会催申候、私は御城は入日にて断、雪臣も不参、然ル処酒興に乗じ亮澄と前田法眼と申医者、大喧嘩を仕出し、石津平介の首引抜と法眼いきまき罵り、飛かゝるべき有様故、平介此形勢に恐れ、実に手つき相詫候よし、実一奇事也、其起りは何のあやめもなき事と、彼席へ常安も参合居、及取扱候よし、早々参候てはなし申候、其後亦雪臣生玉の酒店にて、酩酊の上喧嘩いたし候由、一笑抱腹仕候云々

神戸村の木屋東左衛門という富家が、和歌好きかして大坂に滞在中の藤井高尚などの多くの国学者を招いてくれたという。垣本雪臣も貧しくて門人からの束脩などだけで、困窮して最後は門人の家に没したというから、こうした宴会に招かれるということも社中の運営に似た社会の社交として大切であり、招かれるからには幾許かの収入にもなったのであろう。前田法眼という医者と大喧嘩をしたというが、いかなるいきさつがあったのか、しかし、この珍事は大きな集まりに不面目なことで、木屋主人の迷惑そうな顔と出席者たちの冷ややかな失笑が浮かぶ。招く側の立場が強いのは芸事の世界の常ながら、学統のまちまちな学者が宴会ということもあってのことであろう。

しかし、石津亮澄の著述の仕事をみるに、俗な表現であるが、硬いところから柔らかいところまであり、本を出すにも商人である書林の都合に合わせ商業ベースに乗せることにも慣れた、雑筆家的な手さばきの器用なところがみえる。生活にゆとりがあるゆえの雑多さではなく、門人をうまくおだてながらも、社交の宗匠としての権威を保ち続ける器用さ、したたかさが求められる和歌宗匠。上田秋成が、洒脱、脱俗的な生活を送ったようにみせながら、生活は門人たちの支えが頼りであった。大坂では、医者は新町へ出かけるときの供にうってつけの人たちであり、気難しい信念の人、上田秋成でさへ「仲人」と「家移り（やうつり）の仲介」はするまい、との覚悟で医者の看板を掲げたのである。「太鼓医者」が多いなかで、容易に先生の看板は維持出来なかった。

前田法眼という医者と派手な大喧嘩をした石津亮澄、父の村田春門に医者と和歌宗匠のグタグタをおもしろそうに報告している。村田嘉言ほ「御城入日にて」という父が、水野忠邦の国学の師、和歌の先生という縁で、若くして結構な立場であるのと石津亮澄とは自ずと歩み方まで違っていたというのも言い過ぎはあるまい。さらに、いうと、秋成は門跡寺院に出入りして法親王の文化サロンの構成員という誇りも権威もあったであろうが、石津亮澄の門人は大坂の商人でその敷居の高さがないかわりに、経済を優先させる実利的な十露盤に合わねば門人を引きつけ続けるのも難しいという土地柄で活躍したという点に注目したく思う。

三、石津亮澄の著述

著述の雑多さについては、さきに触れたがここでは詳細にいくつかをあげていきたく思う。成立年の不明のものが多いが、仮に年記、序跋なども参考に年代順にあげていきたい。

1　『掌中仮名字例』　横本一冊　縦六・八、横一七・〇cm（架蔵）

石津亮澄文化六年三月三日序・寛政十一己未歳四月刊

『和歌幣袋』として他の尾崎雅嘉の著などの、『掌中明題集』・『続掌中明題集』・『掌中題林抄』・『掌中まさな草』と合刻合冊されたものであるが、おそらく『掌中仮名字例』というかたちで出版されたものもあろう。『掌中仮名字例』だけは序一丁・本文二十丁と薄冊なものであるが、尾崎雅嘉とともに出した本であり、和歌作法書の類書であるということに雅嘉の若いときの著述に類したもので、無名な若い学者の本でも書肆が出してくれる本というと、こうした本なのであろう。『掌中仮名字例』は、和歌和文に用いる文字や言葉の仮名遣いを、正しくしたものを集め、いろは順にしたもので、「（前略）…今うひまなひの人のためにそのようあるもののみえらみて会席と旅中との用にそなふか事になむときに文化六といふとしのやよひみかの日　石津亮澄しるす」と序文に書いている。

「和字正濫抄」「古言悌」のダイジェスト版にしたとも石津亮澄序文にあり、初心者向け和歌作法書として作られた『和歌幣袋』のなかの一項目というほうがふさわしいかもしれない。

2　『柳翁狂歌類題』一冊　縦一九・一、横一三・一cm（龍谷大学大宮図書館）

文化六己巳九月刊

亮澄著書で狂歌のものとして確認できるものとしては、刊行された『柳翁狂歌類題』のみだが、書名としては『狂歌題林集』『狂歌題林集目録並大意』があがっている(8)。やや長いが無心亭有耳(石津亮澄の狂歌号)序文は狂歌論にも作家論にもなっているので、次にあげる。

俳諧歌は。古今集にえらはせ給ひてより。和歌の一の体となりて。世〻の撰集にもあまた見えたり。また狂歌は。この俳諧うたの中の。一のすかたにして。和歌の先賢もなほすて給はさりき。されは近き頃にして。此すかたをうまくえたるは。浪華の油煙斎のおきなりけり。そも〳〵狂歌としもいへる名目のものにはしめて見えたるは。頓阿上人の井蛙抄に。水無瀬の御歌所のことをいへるそはしめなるへき。されと其かきさまをおもふに。猶はやくよりしかいひならはしたりとおほしき事あり。又狂歌としもわきてはなくて。此すかたによみなせる歌ともは。万葉集をはしめ。代〻の撰集。いへ〳〵の集ともにも。あまた見えたり。こはたゝ一ふしおかしく興あらせむとて。詠いつれは。おのつから此すかたに成はなりけり。それかなかに。中頃暁月坊の上人なん。わきて此すかたをこのみて。常によみ給ひける。されは酒百首といへるもの。今の世にものこれり。又かの水無瀬には。無心の座を。かまへさせ給ひたりとは。たゝ宗見えたれとも。たゝ宗行卿の。耳しあれはといふ歌のほかは。たえて今の世にはつたはらす。それより後は。わきて狂歌とて。このめる人も聞えす。なにかしの狂歌合なといふもの。これかれのこりて。いとふるしとは見ゆれと。年月も作者の名もさたかならす。こゝに建仁寺の雄長老と聞えし上人なん。此すかたをふかくこのみて堀河の百首題を詠て。也足軒に評のことはをこひ給ひける。其頃玄旨法印貞徳老人なとも。おなしくよみ給ひしより。うちつゝきて此百首題をよみし人も。あまたきこゆ。さるは狂歌に百首の題をまうけて。よめるはしめなりけり。又寛永の頃。浪華に生白堂行風といふ人あり。此道をふかくこのめるあまり。古今夷曲集を。えらみたりしに。何かしのみやとか。これをいとめてさせ給ひて。ほのかに雲のうへまても。聞えあけさせ給ひけるは。いとかしこきわさなりや。かゝりしより後は。此道いよ〳〵さかむにおこりて。うちつゝき。後撰銀葉の両集をもえらめり。翁はこの行風か。未年にうまれさせ給へり。父を貞因といふ。貞徳翁のなかれをくみて。連歌に長し。また狂歌をもよくし給ひけり。翁は父につきてまなひ。又其後をとこやまの信海法印にとひ給ひしか。おのつからなる器量ありしかは。いとわかきより人もゆるせしと見えて。後撰夷曲集に。九首まて入たりける。翁のうたの。ものに見えたるは。此集をはしめとす。それより後は。其名いよ〳〵たかくして。此道をすける人の。翁の門にいらぬはなかりき。されは今の世にいたりても。此道をもてあそへる人の。翁のなかれならさるはなし。されはたれもし。翁の風をしたひ。おきなの歌のさまをまねふことなるに。近きころのうひまなひは。ともすれは。あらぬかたに。ことはよこなまり。人のいとむつかしけに聞ゆるはいとおほつかなし。こは翁のうたのかたそはのみを見て。狂歌の体はさるものよおもひあやまれるによれるなるへし。かの虎といふけものゝ。一すしの毛をもて。黄なりとも黒しとも。いひさためたらんには。かれか身に。あやあることの。つひにしらるましきかことし。翁のうたもまたしかなり。あまねくこゝらの歌を。見わたして後にこそ。おきなの本意としたまふ処もしらるへけれ。されとなにくれとおほくの集にいりたるを。あまた見わたさむは。いとわつらはしくものうかへけれはとて。其歌ともをひとつにあつめて。ちいさきとちふみとはなしぬ。かゝれは今より後。おきなのすかたを。まなはんとこひねかふ人は。まつ。此集をよく見て。おきなかほいとせる処をよくしりて後。おのか歌のあやまれるをあらためは。自然に堂にのほり。室にいるへし。其時そ今の世のあしくけかれたるすかたをそゝきて。翁のなかれをくめる。名をけさゝらんものか。ときに文化六といふとしの。睦月もちの夜。ともしひのもとにして。無心亭有耳かしるす

上方狂歌のながれのひとつとして、注目してもよいものであろうが、石津亮澄が無心亭有耳の号の由来や学統や狂歌論にまで及んで述べている。

3 『昔語松虫墳』 六巻六冊 横二十二・四、縦十五・五cm

（京都大学附属図書館蔵）文化八年辛未四月新刻刊

石津亮澄の絵入読本で、飯田正一「石津亮済とその歌集」(7)に、内容に触れられているので、ここでは詳述しないが、上方では国学者漢学者で読本に手を染める者が多いということは、考証研究とは異分野のように見えながら、実は考証研究とならび、意欲のそそられる創作活動であったといえそうである。富士谷成章が読本の草稿を書いていたり、浜松歌国が読本を多く残したこととともあわせて一考すべきことであろう。『昔語松虫墳』には富士谷御杖序文が備わる。

次に、石津亮澄(聴雨軒)序文をあげる。

ひをむしの日をくらしかねてつれ〳〵なるまゝ鈴虫の古き世にありとしもきかぬことをきいつけぬれは蜘蛛のいのいとおほつかなくはたおりめの綾にあやしくなむさるは胡蝶の夢のゆめのやうなるを夢もの語とやなつくへき又松虫の塚をしもとりわきいひ出たれはさもや負すへきよし所はとまれかくまれはかりのものをも茅蜩のくらしかたき春の日秋つむしのあきの長き夜にはみん人もあらんとて世にもていつるにやおもへはいとおこなりかし　聞雨軒

また巻頭の目録の後に十返舎一九の阿倍野旧跡松虫塚の歌を添えている。

生ひしけるくさにかくせとかくれぬは野中にたてる松むしの墳　東民　十返舎一九識

絵入読本で、絵は桂向山人、十二章に分かれ野田左衛門氏家一族の復讐談である。

十二章は次の章立となっている。

第一桂のふた葉　第二浪速のあし　第三花ぬすまるゝ人
第四草葉の露　第五粟いゐの杉　第六花かつみ
第七松のおち葉　第八鏡のうら榊　第九野への千草
第十かしは木　第十一見こしのまつ　第十二桂の木のさかえ

ここでは、京都大学附属図書館(大惣本)を用いたが、架蔵本に三種あり、後刷本は序跋の無いものがあり、表紙にも異装がある。

3『和歌新呉竹集』　上下二冊　縦一七・五、横一一・九cm　（架蔵）

文化十五年戊寅正月刊、

書林のよくだした和歌作法書の類書として、既に版本としてあるもののコンパクト版で訂補を施して出したものであるが、一定の部数が売れ息の長い本としてこうした歌学に関わる本は、尾崎雅嘉も多く書いている。版形中本の『和歌新呉竹集』は『和歌呉竹集』(大本で版本が既にある。それから中本が出版されている。)とともに、二点を併せて刊行されたようである。尾崎雅嘉校訂『和歌呉竹集』は、非常に売れた本のようで二十種以上の奥付刊記があるようである。次に亮澄の凡例があるのであげる。

これはさきの呉竹集にもれたる詞とものおほかるを古人池永秦良くちをしくおもへりしにやこれかれの注尺書の中よりたつね出てかのふみと同しさまなる事ともをこゝらあつめおけりしをふみあき人かつらきもとなりつたへもたりしなりこたひ書きよめてすりかたきに物すとておのれにかうかへた、せよとこふ秦良も浪速人にて名をきゝわたりし人なれはいふにまかせて一わたりよみわたすにふと書あやまてりと見ゆると仮字のたかへる処のあるとをたゝしあらためてかえしあたふついてにこのふみとさきの呉竹集とをあわせ見はいにしへの雅言の注尺をもとめんにおほかたもるゝものはあらしとおもふよしをひとくたりそのはしにものする事になむ

文化十二年七月七日　石津亮澄識

4『女訓玉文庫』　一冊　縦二五・〇、横一七・六cm

香川大学附属図書館(神原文庫)天保十四年卯夏新版刊

通俗的な絵入女子教育書で、「女農業の図」「本朝女二十四孝」「女三神の図」「わが国いにしへ親孝りのほまれある又貞潔にしてみさほを守り人々をゑらみ出したるなり」「三神詠の事」「衣服しみ落し伝」「男女相生事」「女文封じやう」「婚礼の図式」「幹支互性六十の図」の十からなり、通俗書らしい教養書仕立の本である。ここで、香川大学附属図書館(神原文庫)蔵本、天保十四年版であるが、初版は未見、出願は文化十年になっているのでここにあげた。『大坂本屋仲間記録』(8)にもあがるが『享保以後大阪出版書籍目録』(9)をあげておく。

百人一首　女訓玉文庫　一冊
絵　抄
作者　石津平助(曽根崎村)

板元　加賀屋弥助（伝馬町）
出願　文化十年七月
許可　文化十年閏十一月十九日

5　『漫吟集類題』　四冊　縦十七・五、横十一・八cm
（大阪府立中ノ島図書館・朝日文庫）
文化十一季春三月刊

契沖の歌集「漫吟集」の一点であるが、版本や写本様々な本のあるなかでも、最も歌数の多いものに属するという（11『契沖全集』第6巻、『契沖全集』第7巻）。石津亮澄校訂出版の経緯を次のように述べている、「漫吟集」は龍公美の校訂出版の本に誤りが少なくないので誤りを直すうちに、その本の版木が天明八年の大火に消失した、そこで「公美の考せし本」と「小西何かしか書あつめてあさりまのあたり校正をこひしといふ本をうつしつたえたるとの」「ふたつは歌の数のこよなくすくなけれと」今は歌数の多い本もあり、それらを合わせて校訂したので出版すると跋文に書いている。石津亮澄の仕事として、和歌や古典研究書・古典注釈書の校訂出版が多い。考証学の最も盛んな時期とはいえ、これらは石津亮澄のライフワークの一つであった。

6　『紫家七論』　未見（この刊本は未刊）

『大坂本屋仲間記録』⑿、『享保以後大阪出版書籍目録』⒀などに載るものからあげる。『大坂本屋仲間記録』文化十三年四月二十日、（定日寄合）に「同人より、紫家七論・源氏物語新釈惣考、合刻之願本、元株之書付相添持参いたし候ニ付、預り置候事」、『享保以後大阪出版書籍目録』に「紫家七論　作者　藤原為章　校者　石津平助（南本町二丁目）」と載る。

7　『源氏物語新釈惣考』　一冊　縦一七・八、横一二・一cm
（大阪市立大学附属図書館・森文庫）
文化十三丙子歳十二月刊

賀茂真淵の著書『源氏物語新釈惣考』に、本居宣長の説を頭書として加え、校訂を施したものである。石津亮澄跋文が備わるのであげる。

加茂翁源氏物語新釈惣考一巻橋本稲彦かつたへたる本を文字の誤なとをたゝしあらためてかき清め畢ぬときに文化十三年春正月
浪華　石津亮澄

8　『屏風絵題和歌集』　一冊　縦一七・二、横一二・一cm
（大阪府立中ノ島図書館蔵）
文政三庚辰歳二月刊

「古今集」から「新古今集」までの二十一代集と「新葉和歌集」とのなかから屏風・障子の絵の歌、歌絵、扇の絵に書いたものなど、すべて絵を題にして詠んだ歌の限りすべてを集めたものという。それに四季・恋・雑などの部立部類をして、屏風は大嘗会・賀のため調えることが多いので、この集ではそれに従い神祇・賀の部類におさめて順を立てたという。同じ和歌が、二つの撰集に載る場合は、古い撰集をさきにしている。また『屏風絵題和歌集』で、「立春」「子日」などの題は、撰集でついたものではなく、初学の人のために石津亮澄が施したものである。「拾遺和歌集」では、藤の歌を夏の部におさめているが、ここでは当時の類題にあるように春の部におさめている。和歌研究史からも興味ある本である。序文は京都にいて、村田春海門で江戸派歌人（大江戸風）として特異な立場を占めていた大江広海が書いている。

9　『萬葉二聖集』　二冊　縦一七・三、横一二・〇cm
（大阪市立大学附属図書館蔵・森文庫）
文政二年己卯月刊

「萬葉集」に載る柿本人麻呂と山部赤人との歌、「人麿歌集」の歌、などを部類部立して編んだものである。初学の人にむけてとことわって、長歌も部類したという。収録歌数をみると、「万葉集」から（一三一首）・「人麿歌集」から（四五〇首）、「万葉集」の（一三一首）のうちわけは柿本人麿（八一首）山部赤人（五〇首）で、「人麿歌集」に載る旋頭歌（三八首）も分類している。また「聖伝」として二人の伝記も亮済は記している。

10　『金毘羅山名所図会』　（活字版、原本所在不明「上原準一氏蔵」）
（上越教育大学附属図書館蔵、『香川叢書　三』）
昭和四十七年六月十七日刊、香川県編、名著出版

未刊で稿本のまま伝来したというが、『香川叢書　三』に所収、名所図会流行にあわせて書かれたもののようである。金毘羅大権現参詣のための案内図絵で、海路、丸亀港に、上陸してから金毘羅山に参詣、金毘羅山の諸堂・祭事・風景、参詣道中の名所旧跡を巡って多度津港にでるま

でを記している。名所図会は絵の出来が売れ行きを大きく左右したというが、大原東野の筆。奈良の画家大原東野は琴平の近くの苗田に寄寓していたという、烏山城主大久保侯、藤忠成の序文が備わる。

大坂　　石津亮澄　撰
　　大原東野　校
讃岐丸亀　　横関碧松　同

とあるので、丸亀の人が関わったこともわかる。

11『増補　新撰はし書ふり』　二冊　縦一七・七、横一二・二cm
（大坂府立中之島図書館蔵）
文政三庚辰歳三月刊

建部綾足著『はし書ふり』に、甲斐の人である早川広海が補訂したものがあり、さらに石津亮澄が増補を加えたものである。上巻は四季・まじわり・哀傷・賀に別かち、下巻は恋・紀行・離別・雑に別れている。序文は荷田信美の序が備わる。

12『和歌拾遺六帖』　一冊　縦二五・一、横一八・五cm
（大坂府立中之島図書館）
文政三庚辰歳七月刊

「古今和歌六帖」に関する契沖の考説を列記したものである。「万葉集」和歌で「古今和歌六帖」にあるものが多いことをみて、その異同を調べ、訓点の差異を検討、「萬葉代匠記」の副産物ともいえる「古今和歌六帖」研究は校正本を生んだ。元禄四年に漢文序を添え、『新校　古今和歌六帖』が出された。『和歌拾遺六帖』は石津亮澄が校正本に書き入れられた契沖自説を列記して一冊となしたものである。次に、石津亮澄跋文をあげる。

此ふみはあさりの古今六帖のうたともをこれかれのふみにかうかへあはせらるとておもひよられしふし〳〵ををち〳〵かきしるされしなりさる故にかの校正されし本に書入られしこととともを写しつたへたる人はこれをもともにもたるもあれといとあやまり多きをとしころうれへたりしに此此ある人の家に師のみつからかけるをつたへたりといふをきゝてこひかりて其手のまゝをすきうつしにしてかくはものしたるなりあひつきて校正されし本に書入られし事ともをもよくたゝしてちかきうちにすりかた木にへくおもふ事になむ

文政三年四月　石津亮澄

尾崎雅嘉はまだ存命中であるが、本居大平が師として序文を寄せている。序文のなかで、「この一巻の。阿闍梨のみつからかきおかれたるを。或人のひめもたりしを。石津亮澄の。たゝそのまゝにうつしとりて。世にひろめむと。板にゑらせたるは。阿闍梨の心にも。いかにうれしくおほさるらむ」また「長き代に。常磐に堅磐に。つたはらむことはた。石津のくちせぬ功ならましと。かえす〳〵うれしく思ふ心を。かくいふになむありける」ともしている。

13『袖珍　古言梯』　横本一冊　縦四・〇、横一六・〇cm
（京都大学附属図書館蔵、谷村文庫）
天保五年甲午十二月刊

楫取魚彦著「古言梯」を校合したものである。「古言梯」は契沖仮名遣いの証となる語を古典から抜きだして、五十音順に配列している。初学の人が古典研究や和文を書くときの便覧として、またコンパクトな横本一冊の体裁もあってよく売れた本である。

四、むすびに

石津亮澄の著述をあげて、その一点ずつについてあらましをあげたが、和歌について、また随筆『富草屋雑録』については、別に稿を改めてあげたい。

著書を通じていえることは、石津亮澄は通俗的な本の出版にも熱心な国学者で初心者むけの平穏な内容の和歌専門基礎書籍を書林の商業ベースに応じて次々と書いた人といえるであろう。また、次々と書いたというよりは、次々と著名な本の出版のために校合補訂に励んだというほうが正しいであろう。

近世後期から幕末期、文化文政期の上方の文人の増加は、より国学の成果が生かされた和歌の普及と相俟って、堂上歌学などは身分地位に応じてのたしなみであって、無位無官で和歌を詠もうとする人（町人や富裕な豊民層、地下（ぢげ）の人々）にとっては国学者著述も新説などではなく、江戸時代中期以降には多くの歌書類が、もはや読むべき古典として存在

していたし、掌中本や中本サイズの手ごろな本こそ、数多い近世後期の歌人たちのニーズに応えた出版物であった。7『源氏物語新釈惣考』や、12『袖珍　古言梯』は書名が和歌初心者にも知られていた、そうした本が売れたのである。

石津亮澄は、鋭い新説を求められる国学先生などではなく、狂歌にも名所図会にもと雑多な著作があり、和歌にも適切な入門書を数多く世に送り出す、商都大坂にはふさわしい学者であったと、数多くの著述の傾向が教えてくれる。

注

(1) 管宗次『群書一覧研究』（一九八九年六月三十日刊、和泉書院）
(2) 森繁夫・中野荘次補訂『名家伝記資料集成』（昭和五十九年二月一日刊、思文閣出版）
(3) 国学院大学日本文化研究所編『和学者総覧』（平成二年三月二十日刊、汲古書院）
(4) 『大坂本屋仲間記録』（昭和五十一年三月三十日刊、大阪府立中之島図書館編集発行）
(5) 『享保以後大阪出版書籍目録』（昭和十一年五月二十五日刊、編集兼発行博多久吉・大阪図書出版業組合）
(6) 渡辺金造編『渡辺刀水集　三』（日本書誌学大系47、3）（昭和六十二年十一月二十五日刊、青裳堂書店）
(7) 飯田正一「石津亮澄とその歌集」（『国文学』二十八号、関西大学国文学会、昭和三十五年一月刊）
(8) (5)に同じ。狂歌題林集目録並大意、丁数二十八丁、一冊
　集者　石津並助（曽根崎村）
　版元　扇屋利助（百貫町）
　出願　文化十二年十一月
　許可　文化十三年四月十二日
　と載るが未刊か。
(9) (4)に同じ。
(10) (5)に同じ。
(11) 『契沖全集』（第六巻、大正十五年十二月十日刊・第七巻、昭和二年一月二十日刊、佐佐木信綱編纂、朝日新聞社）
(12) (4)、(5)に同じ。

七

ISHIZU SUKEZUMI
—a typical Japanese classical scholar who lived in the late Edo period—

Shuji SUGA

Abstract

This paper investigates Ishizu Sukezumi, a Japanese classical scholar in the late Edo period, and his literary works. His studies range from waka or classical Japanese poetry to kyôka or satirical waka and novels which he himself wrote also. This versatility shows his being a typical scholar who lived in the late Edo era.

本稿は江戸時代後期の国学者である石津亮澄の著書についての考察をまとめたものである。石津亮澄の著書は、和歌研究だけでなく、狂歌や小説の創作にまで及んでおり、非常に広い分野での執筆がみられる。その古典研究から創作執筆に至るまで、広い分野に渉る著書のあることこそ、江戸時代後期の学者らしい姿であったことを考察した。